

教育長だより No. 27

2022年2月25日

※ 2年半前の改訂版です。

子どもは好きな人からしか学ばない

～ 子どもの学びは「先生の魅力」から ～

「人は、尊敬する人からしか学ばない。」という言葉があります。尊敬されるに足る人。そういう人間から学ぶものはたくさんあります。これを子どもに置き換えると上記の言葉となります。どうとらえますか？ 何年か教員をしている方なら、マイナスの思いあたる子がいるのではないのでしょうか。例えば、子どもの問題行動がわかり、感情に任せてその「指導」をしたら、その後の授業にその子が全くのってこなくなった。子どもとの妙な距離感ができてしまった。・・・こんなことです。子どもからすると、「先生に怒られた。腹立つ！」とでも言いましょうか。本人の納得ができていない先生の指導ですよね。私にはそんな経験がいくつもありました。今となっては「苦い思い出」ですが、関係修復に大変な労力がいりました。（もう一つ、「力で抑える指導」もこの部類です。）

私たち大人は、いくらイヤな人でも「この話は聞いておかないと、あとで自分の損になるから・・・。」と、無理やりでも頭で割り切ることができます。しかし、子どもはそうではありません。一旦「イヤな人」と見れば、その子は「学びのシャッター」を降ろしてしまいます。

ところで、教科の勉強は先生が圧倒的な力量を持っていますよね。ですから、子どもは先生の授業での「投げかけ」から精一杯考え、友だちと交流する中で自分の力（学力）を伸ばそうと務めます。そうして「わかる喜び」を会得します。こうした子どもの学習の土台となるのが「先生の魅力」です。魅力があるから先生を好きになるのです。どのように高めていけばいいのか？ もちろん教科力量を高めるのは当然です。しかし、それ以上に大切なのが「人としての魅力」です。例えば朝の会で先生が「自分のこと」（失敗談や経験）を話したとき、また、授業での「余談」や「脱線」したとき、子どもたちは食い入るように先生の話に耳を傾けてくれます。これこそ先生の魅力の発信です。授業中に何度も「静かにしなさい！」と言う必要は全くありません。先生を人生の先輩として見てくれます。

さて、そんな魅力は？「人間の幅」とでも言いましょうか。それを大きくするのは2つあります。まず1つは、『多様な経験やチャレンジ』です。学校とは全く関係のないことでもいいのです。おもしろい本から発見したとか、こんな変わった体験をした、あるいは、こんなところへ行ったなど。日ごろの業務とはかけ離れたこと、あるいは「目からうろこ」の視点からの話がおもしろいと思います。

そして、もう1つは『自分に返す力』です。典型例は「授業集中」。授業中に子どもたちが騒いでしまうのは「子どもが悪い」と見るか、「自分の授業力が弱い」と見るかです。あなたはどちらですか？ 「もっと子どもをひきつけるような授業ができれば、騒がしくなることはないはず・・・」こんな風に自分に返すことができたなら、あなたの授業力量は向上するでしょう。これは何も授業に限ったことではありません。子どもや保護者、教職員との人間関係づくりにとも言えることです。そして、しばしばプライドの高い人は自分に返すことが難しいようです。しかし、それをあえて乗り越えたら、素晴らしい先生に成長することでしょう。もちろん、人としても尊敬されるはずですよ。